

ART BRUT ART BRUT ART BRUT

アール・ブリュット・ ジャポネ展

ニューズレター

URL:<http://www.art-brut.jp>

✈ **Vol. 3**



アール・ブリュットとは何か。

作家／音楽家／映画監督

辻仁成

長年パリで暮らしていますが、不勉強なことに、アール・ブリュットという言葉は知りませんでした。ところがひょうんなことから一気に私の前にこの単語が押し寄せて、私を呑み込んでしまったのです。なんの予備知識もなく私と妻はパリにある日本大使公邸で行われたアール・ブリュットのパーティーに顔を出すことになりました。こういう公の場に二人で出ていくことはめったにありません。まず、私たちがここに出席しようと思った理由はその言葉「アール・ブリュット」が知的障害のある方などを含む、アカデミックな手法を持たない方々によって生み出された芸術全般を指す言葉だと知ったからなのです。

ここパリで日本のアール・ブリュット作家約60人による一大美術展「ART BRUT JAPONAIS」が開催されます。展示点数は1000点に及びます。見渡せばパリ中にポスターが貼られ、パリの電光掲示板にも美術展の案内が表示されていました。フランス人のこの関心の高さはいったいなんなのでしょう？ラジオでもテレビでも紹介されています。私は大使館に展示されたいくつかの作品を見て、驚きました。そこには一つのコンテンポラリーアートの原始的な一撃、もしくは別の道を辿った完成品が展示されているではありませんか。

アール・ブリュットという言葉は20世紀にフランスの画家、ジャン・デュビュッフェによって考案されました。英語ではアウトサイダー・アートと呼ばれていますが、関係者の中にはどうしてアウトサイドなのか、という声がある一方、むしろインサイドに対抗する新しい感性の出現を現すカッコいい表現という意見もあるようです。個人的にはフランス語のアール・ブリュット、つまり「自然のままの芸術」と

いう言葉が一番気に入っています。さすがにデュビュッフェらしい表現ですね。

私は去年、日本滞在中に、たまたまNHKのドキュメンタリー番組で話題のアール・ブリュット作家、澤田真一さんの制作風景の映像を見ていました。まさかここで繋がると思わず、その激しいプリミティブな作風に画面を通して圧倒されたものです。その彼が会場にいました。作品もありました。ドキュメンタリーを通して知っていた知識と実際に彼を目の前にして感じた迫力の両方によって、私は言葉を失いました。人間が内側に秘めた原始的なマグマを圧倒的な集中力で創作したこの作家を現在の批評家が分類できずにいることを面白く思いました。教育と知性によって築きあげられた現代芸術の根底を揺るがす彼らの存在を抹殺、批判、軽視することはできません。すべての展示作品がコンテンポランの第一線に立てる作品かどうかは誰にもわかりませんが、今回紹介される多くの作家たちの取り組みや姿勢から、人間の根源的な表現へのこだわりと精神解放への無限の力を目の当たりにさせられます。批評では括弧の出来ない彼らの想像力を芸術と呼ばずに何を芸術というのか、というメビウスの輪の中に我々は追いつまされていきます。残念ながら、お膝元、日本のアカデミズムには理解の出来ないこれらのことが、フランスの芸術界、メディアには大いに評価されているのですから、まことに不思議です。恥ずかしいことに私も知りませんでした。だからこそ、知りたい、広めなければ、と思いました。知らないことは一時の恥ですが、知れば永遠の財産となります。同じように気付かれた方は一緒にまず身近で広めていきましょう。きっと、まもなく、日本でもアール・ブリュットへの関心が高まることになるのでしょうか。ア

ティストたちの純粋な創作意欲が勝手に利用されないよう、支援者たちはその権利を守る使命を担っています。

私は澤田さんをはじめ十名ほどのアーティストと会いました。彼らは社会的には私たちと普通に言葉を交わせる状態にはありません。でも、彼らの精神の健全な波動を私は受け取ることが出来、これまで経験したことがないくらい幸せな時間を持つことができました。妻の周りを囲み、写真撮影をする知的障害・知的機能障害者の方々の柔らかい笑みが忘れられません。興味深いことに、彼らは作品を作り上げてしまったら、それで出来あがった作品には関心がなくなって、離れてしまうのだそうです。健康者は、そこから固執がはじまり、権利が生まれ、評価を気にする強欲の世界へと連れていかれるというのに。多くのアール・ブリュットの作家たちは出来あがったら、おしまいなのです。そのことを聞いて、いっそう彼らのことが愛しくなり、心配にもなりました。守るという言葉は危険ですが、彼らの生きる世界が荒らされないことを遠くから見守り祈るばかりです。いや、祈るだけではだめですね。その作品を世界中の人々に見て、知ってもらい、感動を分けあわないと。そこに、人間の本来の生きる意味を、見つけることが出来ます。

パリではモンマルトルの丘の袂にあるパリ市が運営するアル・サン・ピエール美術館で来年の一月二日まで開催されています。パリへのご旅行を計画されている皆様、ぜひ、一度足をお運びください。人間の可能性と想像力の果てしなさを受け取ることが出来ます。

※この文章は、Insee TSMJ Honorary Official Web Site (<http://www.j-tsuji-h.com/>)に掲載されたものを、ご本人の承諾を得て転載しています。

アール・ブリュット・ジャポネ展 開幕記念メッセージ

アウトサイダーアートパリ展

東京藝術大学教授／アーティスト

日比野克彦

偶然だった。パリで日本のアウトサイダーアートの展覧会があると知ったのは偶然だった。そのポスターをパリで見たのは3月中旬、パリの日本領事館で見た。いや正確にいうと目には入ってはいったが、いつどこでやっているところまでは見ていなかった。「アウトサイダーアートの絵柄のポスターが貼ってあるなあ」という意識までであった。その後私はパリからアフリカのカメルーンに飛んで、NHKのワールドカップ2010サウスアフリカ大会の番組収録をし、アウトサイダーアートもびっくりのプリミティブアートを満喫し、象の化身のお面などを市場で買い再びパリに戻ってくる。そこに1本のメールが入ってきた。「NHKのニュースで、パリで行われている日本のアウトサイダーアートを取り上げるので、コメントをもらいたい」との内容である。その時に「あっ！日本領事館で見たあのポスターだ！」と初めてパリで展覧会が行われていることに気がつくのである。メールにはオープニングの動画が添付されていて、そこにははたよしこさんも映っていた。「なんだパリに来ていたんだ、会えばよかった」と思いながら、その時は私はアフリカであったので無理ではあったのだが……。それにしても良く私がパリにいるということを知っていたなあと思いつつ、直接メールをくれたNHKの人に電話をしてみると。「えっ！日比野さん今パリにいるんですか！！！」というリアクションに「エッ！知らなかったんですか！！！」というリアクション返し！！それじゃあ、NHKパリ支局からカメラ出し

て見ているところを撮影しちゃいましょうか！渡りに船、棚からぼた餅、我田引水、等々。

明日は日本に戻るという前の日の午後アル・サン・ピエール美術館に行きました。場所はモンマルトルのサクレクール寺院のすぐ隣である。ひさしくこの場所には来ていなかった。パリに来て、サクレクールには足は向けなかった。なぜならば混んでるから……。しかし私が初めて海外旅行で目指したのがパリのモンマルトルのまさにこの地域であった。日本では今年印象派の作品が大挙してやってくるが、日本人の印象派好きも衰えないが、私もそうであった。モンマルトルをぶらついてはその風景に酔っていた。あれから30年である。サクレクール寺院は何も変わってはいなかった。アル・サン・ピエール美術館は初めて入った。外観は見覚えがあるが、美術館だらけのパリの中で見落としていた美術館だ。

1階のエントランスには吹き抜け天井のカフェがあり、ここは表の観光客がひしめく様子とは打って変わってくつろぎのスペースである。その向かいにあるミュージアムショップにはこの美術館で行われた展覧会のカタログが並んでいる。アウトサイダーアート、絵本、アフリカンアートなど、アウトロー的な作品の展覧会が多いようである。

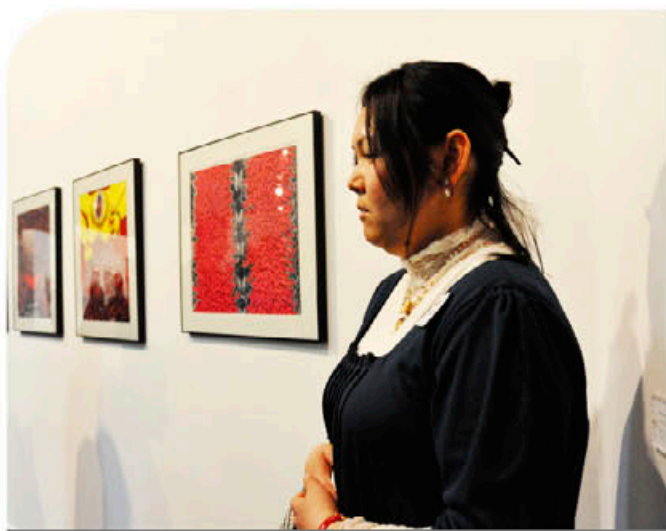
この日は友達と会う約束をしていたので、この美術館で待ち合わせをした。「日比野さん！」2階から声がして見上げると待ち合わせていた友人がいた。私が30分ほど遅れたので、先に

展覧会を見ていたようである。彼女はパリの絵描きと結婚し、このあと一緒にその新居とアトリエにお邪魔するという予定であった。

1階と2階に展示室がある、近江八幡で見た作品も多くあり、なんだか懐かしく思えた。一瞬ここがパリということ忘れてしまいそうである。お客さんは熱心に作品を鑑賞している。アウトサイダーアートの本場のフランスの鑑賞者の御目は高そうである。

私が初めてアウトサイダーアートの存在を知ったのもフランスであった。あれも偶然であった。20年も前の事だったと思うけれど、フランスローザンヌの街をふらふら歩いていた、ミュージアムがあった。時間があつたのでふらりとよつたら、そこがアールブリュットの美術館であった。こんな美術館があつたんだ、こんな領域の芸術があつたんだと驚いたのを今でもはっきり覚えている。

アル・サン・ピエール美術館を出た後に、クリニナクールにある友人の旦那のアトリエによって、この展覧会の事を話したら、「日本のアウトサイダーアートを探していた」とびっくりするほど関心を持っていた。日本に帰ってからもロンドンから来た友達が近江八幡のNO-MAを見てきたとこれまたびっくり！次から次へとこの手の話が周りで起きています。これはきっとなにかが大きく動き出すような気配である。偶然は必然なのかもしれない。アウトサイダーアーティストたちは偶然を必然にする力を持っている。



パリで感じたこと

鮎 万里絵

母と二人でツアーに参加しました。参加を決めるまでは色々不安に思うことがあり、決

めてからも不安に思うことが沢山ありました。病気をしているの、それに関する不安だったり、また言葉も違う習慣も異なると思われる遠い外国に出かけていく不安だったり、出発間際までずっと持っていました。

成田空港から12時間余りかけてパリに着きました。本当に異国、という感じの街並みで、そして田舎住まいの自分にはとても都会だなあと感じました。街を歩くひとの人種が様々なことにも驚きました。そして言葉に関する不安ですが、英仏語、時には日本語の簡単な単語で通じることが割りとあって、思っていたよりは大丈夫でした。

滞在5日目、3月23日に日本大使館でのレセプションに行きました。冒頭、来賓の方々のスピーチの最中にテラスの出入り口の傍に立っていたのですが、出入り口が開放されていて外気の寒さを感じていたら、多分フランス側の招待客の方だったと思うのですが、私の様子に気づいて係の方に出入り口を開けてくれるようお願いして下さったようで、その場ではお礼を言うことが出来なかったのですが、パリで受けた嬉しい親切の一つでした。

レセプション会場は招待客も大勢で、カメラも沢山回っていてとても緊張しました。会場内にも自分の絵を1点飾ってもらいました。絵の前で、普段お世話になっ

ているNO-MAのスタッフさんとはれたりくもったりのスタッフさんと記念写真を一緒に撮ったのが嬉しかったです。

同日の夜にアル・サン・ピエール美術館でオープニングセレモニーがありました。昼間のレセプションよりも更に大勢の人が美術館に居ました。

展示された自分の絵の前で、多分同じ鑑賞ツアーに参加していたと思われる小学生くらいの男の子に「気持ち悪い絵」と言われてちょっと面白かったです。子どもさんにはよく言われがちなのですが、相手が子どもさんだと何か怒るのではなくニヤニヤして面白いなあと感じてしまいます。

こちらでもカメラが沢山居てインタビューを受けました。カメラの前だけではなく色々な方とお話をしました。日本語で話しかけてくれたフランスの方や、図録を指差しながらフランス語で話しかけてくれた方もいました。

今回の旅は沢山の人の出会いがありました。普段ではないことなので、目が回りそうでした。ある作家さんのお母様に温かい言葉をかけてもらい、気持ちの昂ぶりからその場で泣いてしまいましたが、それも嬉しい出会いの一つでした。パリで感じた、良かった、疲れた、少し残念だった、体験した出来事の全部が、同行した母と大勢の方々に支えられ、いい経験となりました。



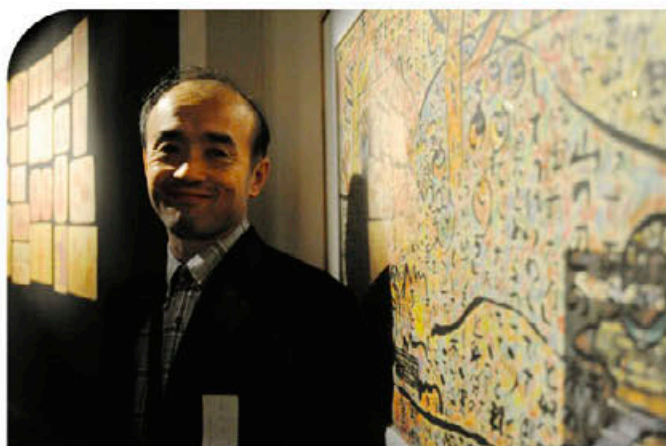
私のフランス探訪記

～仏国の車窓から～

盛岡杉生園 高橋 和彦

わたしははじめにシンカンセンによって東京駅まで行ってさらになりたくうこうからヒコーキによってやく12時間いすにすわって食事をたべてパリにヒコーキがついてヒコーキをおりてバスによってパリのホテルについてそれからねむってパリのシンカンセンによって2時間ぐらいでついているんなチョウコクを見て来ましたそれからヒルをたべてバスにのっ

てホテルにもどりましてそしてパリは雨がふっていましたそれからビヅカンに行って絵を見て来ましたジブンの書いた絵を三マイ見て来ましたつぎはエンソクにあるホテルにもどりましてつぎはかいものについてチカテツののってかいものに行きましたそしてバスにのってホテルにもどって来ましたそしてさいごのバスにのってパリのヒコージョウからパリを出ましたビヅカンでいろいろ人の絵を書いたビヅカンの絵をたくさん見てきましたたいシカンで人の人のたくさんいるとこで日本の寿司をたべて来ましたバスにのってまたホテルにきましたホテルの近くで日本のごはんをやき鳥の食事をしてベットで休みましたつぎにチカテツののってエッヘルとうにエレベーターにのっておくじうまで上って来ましたパリの町がいっぱいに見えましたそれからエレベーターをおりてバスにのってホテルにつきましたそしてホテルのおゆいに入って休みましたつぎにパリの三越について絵はがきを買いましたパリのおかに上ってパリの町を見ましたパリの町からバスにのって2時間半バスにのってフランスのチョウコクを見て来ました絵も見て来ましたそれからパリのヒコージョウに行ってヒコーキにのってヒコーキの中でごはんをたべましたそしてなりたについた時なりたは雨がふっていました



フランス・パリの紀行

すずかけ絵画クラブ 富塚 純光

私は3月19日から7日間会社の有給休暇をもらって、アール・ブリュット・ジャポネ展を見にパリへ行ってきました。

舛次君のお父さんに車で迎えに来てもらって舛次

君、舛次君のお母さん、おばさんと、私、お母さんと一緒に関西国際空港に着きました。

搭乗券やパスポートを見せて、エールフランス291便の飛行機に乗りました。飛行機の中で機内食が出ました。約13時間でパリ・シャルルドゴール空港に着きました。飛行機を降りて団体様は観光バスに乗りました。ガイドの篠田さんが「フランスは厳しくて、バスでもシートベルトをしめていないと罰金を取られることがあります」と言っていました。バスの窓から街を眺めながら通りました。もっと進むと伝統のある歴史的な建物がそびえ立っていました。フランスの地下鉄メトロも走っていました。四十分位でマリオット・リブ・ゴージュホテルに着きました。

北岡さん、中野さん、花巻ルンビニー苑の三井さん、多田さん、村井さんが来ていました。私とお母さんはパリで三井さん、多田さん、村井さんと再会して、とても嬉しかったです。次の20日は観光バスで市内観光をした中で、セーヌ川や、コンコルド広場、アレクサンドル三世橋を見たりして、ルーブル美術館に着きました。駐車場から上がりました。世界中のお客さんでいっぱいの人でした。ミロのヴィーナスやモナリザの絵を見ました。カメラマンの代島さんや大西さんに沢山の写真を撮ってもらいました。シャンゼリゼ大通りを歩いて凱旋門を見たり、エッフェル塔に上ったり、夕食会場

でオーシャンゼリゼの歌を聞いたのも楽しかったです。その次の21日はパリ・リヨン駅からフランスの新幹線に乗りシュバルの理想宮を見に行きました。ノートルダム大聖堂の所からリヨン市街を見渡し、記念写真を撮ってもらったりしました。

次の22日はメトロに乗りシテ駅で降り、パリの警視庁や最高裁判所の所を通ってノートルダム寺院に入りました。中にはきれいなステンドグラスの窓や、石像、絵が沢山ありました。23日は田島征三先生が来られて嬉しかったし、日本大使館では私の丹波篠山のお城ドーナツ(注:お城を人が手をつないで取り囲んだのです)の絵が展示されていました。天ぶらやお寿司とかご馳走になりましたし、中山美穂さんに会えてとても嬉しかったです。その次はパリ市立アルサンピエール美術館のアール・ブリュット・ジャポネ展へ行き、みんなの絵を見ました。舛次君の道具、牛、鳥の絵、一昨年スイスで一緒だった本岡君の鉄道の絵や、澤田君、石野君の焼物の人形も面白かったし、田島先生の団栗の底や木連を使った絵も良かったなあと感じました。宮間英次郎さんの人形の帽子も面白かったです。作品がジグソーパズルや、Tシャツ、ハンカチ、バスタオル、又トランプになったらいいなと思いました。今度はイタリアや、アメリカで展覧会が開かれたら行きたいと思います。

成 田から、大阪から、それぞれがパリ・ドゴール空港に向かって飛びたった。

その長旅をはじめて体験する作家も多かっただろう。

日本大使館でのレセプションやアル・サン・ピエール美術館での

オープニングパーティでは、作家や家族やツアー参加者はおおいに盛り上がった。

日本大使館では、自分の作品も展示されていて、それぞれが大使と握手を交わしていた。

パリ在住の辻仁成さん、中山美穂さん夫婦が大使館に来てくださったことは、

興奮をさらに盛り上げた事だった。

そこで何家族の記念写真を僕は撮らされた事か。

アル・サン・ピエール美術館で、はじめて、自分の作品が並んでいる光景に出会った。

「ここにあるわ！」

「早く記念写真撮って！」

と、それぞれが、この遠い街の大きな美術館で展示された喜びを隠しきれない様子だった。

なかには、「持って帰る！」という作家もいて、なぜここに展示されているのか

一生懸命説明する親の姿もあった。

まさしくこの人は、アウトサイダーアーティストなんだ、と思った瞬間だった。

作 家たちは、自分の飾られている作品の前で取材を受けたり、

写真を撮ったりしているが、何より一番興奮しているのは

親たちではなかっただろうか。

この喜びあう姿の影には、

やってのけた滋賀県社会福祉事業団のスタッフの功績がある。

本当にご苦労様でしたと、この場で感謝したい。

パ リ市を散策する自由な時間もたくさんあった。

街を舞台にしている作品を作り続ける、辻勇二さんと吉澤健さんが気になり、

同行させてもらった。

辻勇二さんは、上から見つめる実在と架空の街を描く作家だ。

もちろん現場はエッフェル塔。

写真集『アウトサイダー・アートの作家たち』(角川学芸出版)では、

撮影場所は豊橋市役所の屋上だった。

エッフェル塔でも上にのぼり、じーっと見つめる姿は、その時と何も変わらない。

もの静かで、凝視するというより、優しく柔らかい表情で見つめていた。

今度逢うときには、その記憶が面白く変化し、大きな紙に転写されているかもしれない。

それが何より楽しみだ。

吉澤さんもまた、面白かった。

新宿や渋谷で街の看板を見つめ、ノートにびっしりと書き写す姿は、パリでも健在だった。

オペラ座の前で、おもむろにノートを開き、街の何かを見つめ、メモる。

セーヌ川下りでも、街のどこかを切り取り、ここでもメモる。

どこに行っても、どんな状況でも変わらぬ姿だった。

「何を書いているのかしらね」と母の従子さんは街の散策を親戚と楽しんでいた。

看板の多い都会でしか生きられない作家だと思った。

どの国に行っても、自分は常に自分なんだろうなと、その堂々たる生き方に感心した。

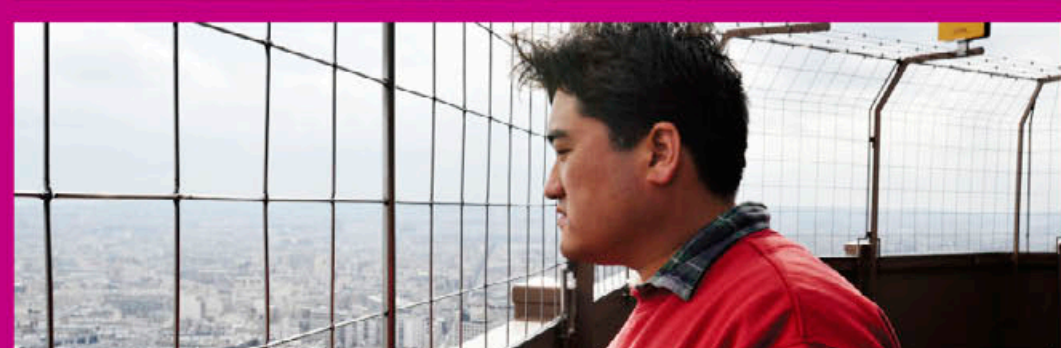
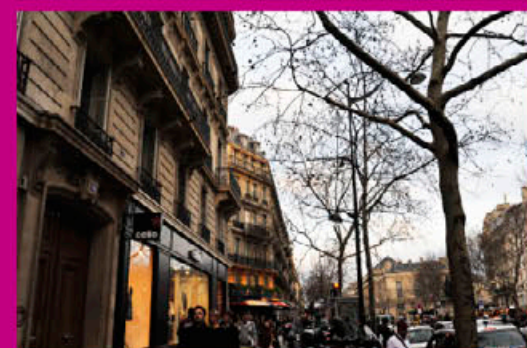
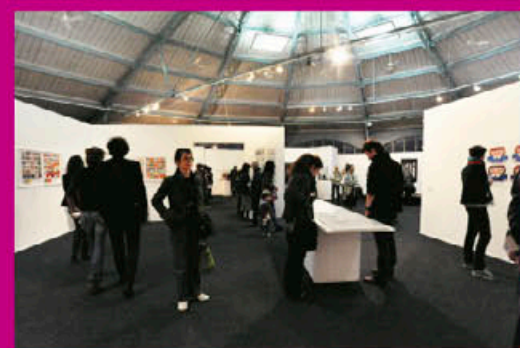
無 事に終わった旅は、今度の作品に何らかの影響はあるのだろうか。

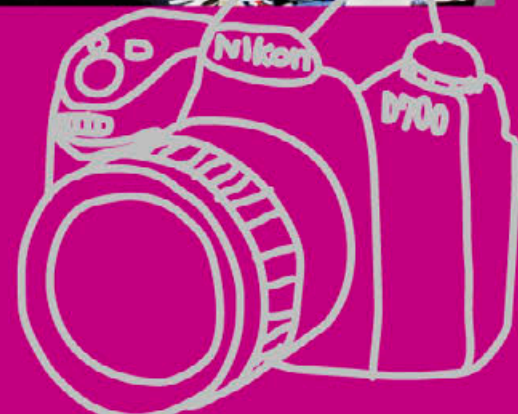
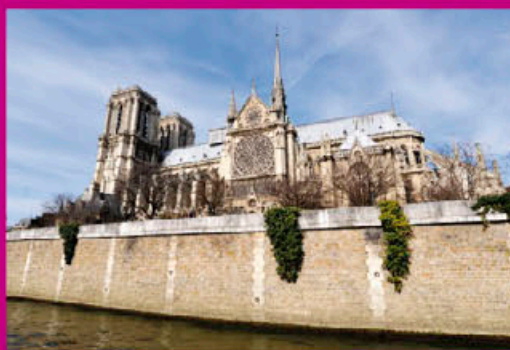
多分、同じスタンスで、同じ速度で描いたり、作ったりする事だろう。

来年1月2日まで。どんな人が見て、どんなつながりができてゆくのか。

作品がつなげてくれる人間の関係は、海を越え、もう止まらない。

写真家 大西 暢夫





たくさんの「分かる分かる！その気持ち！」

石野 孝代

初めての海外旅行を、家族四人で参加させて頂きました。不思議と雨に濡れることもなく、しだいに晴れてきて、まるで歓迎を受けているようなお天気でした。お陰様で、楽しく快適に安心安全の中で過ごさせて頂きました。息子は、前から「パリに行くの。食べに行くの…」と言っておりましたが、さすがに本場のパンは美味しく、いつもお皿に山盛りに取り食べておりました。(セ・ポーン^^)

又、パリは人も街もお洒落で、身振り手振りの鹿兒島弁にも応えて下さり、親切な方ばかりでした。

印象深かったのは、リヨンのシュヴァルの理想宮の見学でした。ひとりの郵便配達夫が、まるで、子どもの遊びの延長のようなお城を作られたのを見て、私も幼い頃、竹藪の中に秘密基地を作って喜々として遊んでいたのを思い出しました。「うーん、分かる、分かるその気持ち！！」これこそが、国際共通語、アール・ブリュットの意義なのでしょう。

日本大使館公邸で、初めて見たビデオの中で、作家さんが色を気持ちよく塗っているシーンを見て、「分かる分かる！その気持ち。」アル・サン・ピエール美術館の中に展示された作品を見て「分かる分かる！その気持ち！」まるで、幼い頃にタイムスリップしたような懐かしい感動を覚えました。

正直に申しますと、障害の子をもつ親からしますと、滋賀県社会福祉事業団の方が、初めから息子の作品を芸術扱いなさるのを見るにつけ、嬉しい反面、なんと奇特な方々なんだろうと思っておりました。しかし、アール・ブリュットは、ほんとに面白い！この度の旅行で、少し分かるような気が致しました。館長さんを初めとして、フランスの長い歴史と文化遺産の中で培われた高い文化意識、何でも受け入れる度量の広さ。最後まで身を粉にして動かれる方々、只々敬服と感謝が胸がいっぱいになりました。皆様の地道な努力の賜物でございます。お陰様で貴重で素晴らしい体験と大いなるパワーを頂きました。有り難うございました。



作家にとつてのジャポネ展

福山六方学園 櫛野 展正

目の前には、いつもの見慣れた作品群。それを見ているのは、見慣れない異国の方々。私は作品を前に、不慣れな片言の英語で精一杯の解説を行いながら、「本当にパリにやってきた」そんな感動を味わっていた。その隣で出展作家の1人、平野信治は今まで味わった事のない大舞台に緊張しながらも、時折顔を上げて笑みを浮かべていた。施設の暮らしの中では、余り見せることのない自信に満ちた表情だった。彼はクレパスを塗りこみ、2005年より絵を描

最高にカッコイイあなた

ルンビニー苑 多田 寿子



下田賢宗さんの独特の口調で「赤い三角のシマシマのパンツと青いウニのパンツと…肌色おちんちんのパジャマは？(パンツ9枚とパジャマ3枚は何処にあるの?)」と何度も何度も確認をして、愛しい作品に再会できる日を楽しみにパリの旅は始まりました。あまりの嬉しさに3日間眠れず、やっと会えた時にはきっと顔を埋めて抱きしめたかったのでしょう…美術館にあるパンツとパジャマを展示から取り外そうとして台に登っていました。あなたは大使館でも美術館でも美人(中山美穂さん)の前でも、いつもと変わらず下田賢宗を表現していました。やっぱりあなたは最高にカッコイイです。ポテトフライとフライドチキンとコカ・コーラと一緒に、パンツとパジャマがパリから帰って来る日を楽しみに待っていますよね。

「アール・ブリュット・ジャポネ展」によせて

蒲生 珠美

早春のパリ、かわいい八重桜が咲き、レンギョウや水仙の花が、春風に揺れる麗らかな佳き日に「アール・ブリュット・ジャポネ展」が開幕した。

開幕に際し駐仏日本大使館にて、すばらしいお祝いのレセプションを開いて頂いた。

齋藤駐仏日本国特命全権大使やリュサルディ、アル・サン・ピエール美術館館長の、心に染み入るお言葉を頂きながら大使公邸の壁に飾られた卓也の絵を見つめていると、「夢のようなパリの出来事」が、喜びと共に実感になり何回も卓也と顔を見合わせ、思わずほほ笑みながらうなずくばかりだった。

レセプションの華やいだ祝宴の余韻が快いまま、オープニング式典が開かれるアル・サン・ピエール美術館へ向かう坂道は、多くの芸術家に愛されたモンマルトルの丘に続き、まるでユトリロが描いた風景そのもののサクレ・クール寺院のすぐ横にパリ市立アル・サン・ピエール美術館は建っていた。

卓也の手をぎゅっと握りしめたまま、美術館の扉を開けると、瞬間、暗くたじろいだ目が瞬くうちに、ほの暗さの中からそれぞれの作品が静かに、力強く、息づくように輝いていた。

スピリット・アート・ミュージアム(※1)で多くの作品は目しているが、実物を見るのは初めてとあって、作品一点一点をくいくいように見入った。

卓也の作品の前に立った時の感動は、瞬間、音も時間も止まった感覚となり、そんな私達親子を、卓也の描いた「犬や花や魚達」は、小さな細胞の一つ一つから光を放ち輝き、楽しそうに、嬉しそう



に迎えてくれた。

「卓也、おめでとう」、卓也は「何？」という顔をしていたが満面の笑顔で応えてくれた。

卓也は、生を受け、歳を重ねるごとに、こだわりを含め多くの既往症があり、いつもピンと張った糸のような生活を送っていた。

命の糸はいつか切れてしまうのではと、私の心の奥底の不安は卓也が17歳のころからいつの間にか消えた。毎日毎日描く絵日記が卓也を変えていった。自分自身が描くことによって、自己表現の満たる生に出会えたのだ。

そんな日々の積み重ねが、「すばらしいパリの出来事」に続いたかと思うと、感無量で小さく震えた。

あらためて、「アール・ブリュット・ジャポネ展」の開催に、ご尽力下さいました諸団体、各関係者の皆様様に心から、深く深く、感謝申し上げます。

(※1 ウェブサイト上のバーチャル美術館。多くの日本のアール・ブリュット作品が見られる。
<http://www.spiritartmuseum.jp/>)

パリで体感したモノ

工房集 梅田 耕

体感してきました。齋藤裕一さん本人、父と3人で。パリということで、行くと決心するまでは、本人・ご家族共々不安で、葛藤もありました。12時間半以上に距離を感じていました。しかし、齋藤さんにとって参加する意味をみんなで確認し合い、決心をしました。成田空港に戻ってきてから、そして今、間違いなかったと実感しています。

63名1000点の作品は圧巻でした。実際に目の当たりにすると、頭の中ではイメージできていたつもりでも、改めて驚かされました。また、滞在中パリ市内の観光もしたのですが、観光が先で、美術館オープンが後というスケジュールだったこともあり、エッフェル塔の展望台からみたあの街に、ルーブル美術館で見たあの作品と同じ地に、作品が展示されているという感動も湧き上がってきました。

パリでは齋藤さんをはじめ、どのアーティストも誇らしげでした。満足感が溢れていました。自分が生み出したものが、パリでの展覧会という“大きい”形になったのですから、ものすごく“大きい”満足感だったに違いありません。自分の名刺をみんなに配る姿。取材カメラを向けられる姿。招待されたパーティーでの姿。そして、自分の作品の前に立ったときの姿。みんなカッコよかった。僕自身も、アーティストと比べるとレベルは低いですが、パリで多くの方々から祝福そして評価されている齋藤さんとなりで立って見ている姿が、周囲にそんな姿に見えればと思いました。僕も満足感でいっぱいでした。

人生におけるこの満足感、とても大切なのだと思います。今回、参加した意味。したいと思ってもなかなかできない経験でした。それもこれも齋藤さん本人のおかげ。加えて、ご家族の方の理解や支援もなくては実現しませんでした。改めて、感謝しています。

まだまだ展覧会は続いていきます。ぜひ、多くの人に作品を観ていただきたい。心揺さぶられる作品に出会ってほしい。そして、この展覧会をきっかけに、障害のある人の作品がさらに広がって、今回体感したモノがもっともっと多くの人に広がってほしいと願っています。そんな力のある作品だとも確信しています。

ところで、齋藤さん本人は日本に戻ってきてから3日間は熱を出して寝込んでしまいました。が、すぐに元気を取り戻し、4月からまたいつもの缶コーヒーとスポーツ新聞の生活に戻っています。ただ、時々「ボンジュール」なんて挨拶していますが…。



き始めた。最初に描いたのは白塗りの顔にちょんまげ姿。TVでお馴染みの志村けんが扮するバカ殿の姿だった。以来、幼少期より憧れていた志村けんをモチーフにした絵を描き続けている。

今回、パリ展出演に当たって地元新聞社から沢山の取材を頂いた。

その中で志村けん本人より、「色遣いがいい。変な打算がないからこそ描けた

誰にもまねできない作品。こういう形で元気を

与えられることに笑いの力のすごさを感じる。続けることが力になる。僕も頑張るから君も頑張ってほしい」と新聞を通じて初めてメッセージを頂くことができた。彼自身にとって大きな喜びとなったことはいうまでもなく、帰国後に送られてきたサイン色紙を手にした時の表情は忘れられない。近年は制作意欲が乏しく、1年以上も絵を描くことから離れていたが、現在、彼は再びクレパスを手に驚異的なスピードで描き続けている。アール・ブリュット・ジャポネ展は、彼に大きなプライドを与えてくれた。そして夢への階段を上るように、「志村けんに逢いたい」という彼の思いは少しずつ実現へと近づいている。

アール・ブリュットの「不思議な、そして素敵な旅」

上田 初子



「ウー、ピコピコ、パー、タタタ、ポコ、ビー」。うん？どこからかゲーム機のサウンド、それと重なるようにかわいらしい歌声、これが途切れることなく続く、S君だな。「ウファ、モツモツ、カタンソ、プワッファー」、フランス語？それともドイツ語？隣の若い女性が目をシロクロさせて思わず「通訳シテクダサイ！」、唯一わかる言葉は「ハゲ！」エンターティナーKさん。一方、背筋をピンと伸ばし、前方の一点をじっと見続け、人間の存在を問い続ける哲学者の如く、他のものを寄せつけない凛とした横顔、彼の長い指からトゲトゲの世界が生まれてくるのだ、憧れのSちゃん。居酒屋で、とびきりうまいものを食べながらワインを飲むことだけを考えている（本当は親の願いかもしれない！）わが「こゆびとさん」は、気持ち良さそうに傍らでグウグウ。ニルス、ではない、アール・ブリュットの不思議な旅はこんな感じで始まった。

憧れのパリの町はどっしりと落ち着いた歴史の重みを感じさせる町だった。一つ一つの建物に何百年もの思い出が刻まれていて、人々の手によって大事に守り続けられてきた努力が「誇り」として感じられる。長い手足をシックな色で包み、彫りの深い顔で前方のみを見つめながら通りを大股で歩いていく女性たちの姿にもそれを感じる。容易には周囲の事に感わされない「あなたはあなた、私は私」といった芯の強さ。なんとかっこいいことか！

このDNAは、パリから新幹線で2時間のフランス第2の都市リヨン、そこからさらにバスで約2時間、オートリーブの町にある「シュバルの理想宮」でさらに強く感じた。郵便配達夫のシュバルはつまずいた石をヒントに「自然が石を彫るなら、私は石を積み上げる建築家」と自分に言い聞かせ、夢の工事を開始し、仕事をしながら約20年、退職した後近くに建てた別邸に住み、さらに15年余りかけて、一人で「理想宮」というとんでもない建物を造り上げてしまう。確かに理想宮に向かうバスの中から見える建物は、きれいに石を並べコンクリートが粘土で固めながら積み重ねられていた。バスから降りたときに同じような建物があったので触ってみる。石の表面はツルツルしていて、河原から拾ってきたような感じだった。しかし、どの建物も決して一人で建てたのではあるまい。シュバルのこの異常なまでの執着心と想像力のもとは何だろう。DNA+アルファ、この+アルファが謎だ。

さて、いよいよ本番。ユトリロ、ルノアール、ゴッホさらにピカソまでが住んだことがあるというモンマルトルの丘に向かう。小雨ふる狭い路地を、恋人たちが肩を寄せ合い、一つの傘に入っしと歩くと、バックにシャンソンが静かに流れる…モンマルトルの丘はそんなところに違いない。だって世界中のアーティストたちの憧れの場所だもの、と自分なりに勝手に想像していた。バスは確かに坂を上っていく。あれ何？これ！バスの中から見えてきた光景は、何軒も続くかつら屋の看板、古着屋のなかな？箱の中に服を積み上げ、道路端に無造作に置いてある。Sという文字で始まる何やらいかがわしい看板、道行く人達の多くはアフリカ系そしてアジア系、へえ、こんなパリの顔もあったんだあ。まさに下町のあの雑多な感

じ、そんな中にパリ市立美術館はあった。前々日にルーブル美術館を見た。さらに、オルセー美術館のそばも通った。これぞ、美術館というすまし顔で建てた。あのパリの中心部、歴史の重みを感じさせるあの感覚と同じだった。しかし、パリ市立美術館アル・サン・ピエールは違っていった。市場を改造したという体育館風の円形ドームの建物が、人々の毎日の生活の中に隣り合って存在していた。

オープン前日の内覧会にたくさんの美術関係者が集まって、ロビーは熱気に包まれていた。展示会場に入っていく。ある、ある、おなじみの作品が…。その中に、「いわて・きららアートコレクション」の常連作家Kさんの作品があった。幾つもの顔が重なり合い、いつもはくすんで見える彼の世界が、計算された照明の中で浮き上がって見える。様々な人間が混沌とした世界で、傷つけあったり、支えあったりしながら生きていく様が見事に表現されている。「おお、すごい！」と思わず歓声を上げてしまった。普通の光の中では黒くしか見えない部分に、さらに彼の世界が存在していたのだ。館長さんは一つ一つの作品のもつ特別の意味を読み取ってこの展示会をプロデュースしたに違いない。どの作品も今まで見たのとは違う表情をしていた。素晴らしい！観客は静かに、じっくりと作品に見入っていた。そして感動の余り、頬を紅潮させていた。自分の内から湧き上がってくるあくなき創作への意欲を紙にぶつけ、また土にぶつけ、糸をもって布にぶつけ、「私」だけの世界を作り上げた作品の群れ！大小の違いはあれ、シュバルの理想宮にも通じる。これが、館長さんが大使館のレセプションで強調されていた芸術の原点なのだ。

さらに、パリでは、「あなたはあなた、私は私」と自分の確たる存在と同じように相手の存在も認める個性の尊重が言葉だけでなく実際の生活の中で培われており、雑多な人種のつぼみの中で、隣にどんな人が居ようとそれは当り前のことであり、彼等の作品が、知的障害があるからとか精神に障害があるからとか少なくともそういう括りで見られるのではなく、一人の作家の作品として確かに受け止められるであろうと確信した。

ところで今回の旅で、彼等が一番生き生きとした表情を見せたのは、美術館で自分の作品を見た時でもなく、ルーブル美術館でもなく、ヴェルサイユ宮殿でも凱旋門でもない。普段、容易に入ることなどできない、いかつい赤い門で閉ざされた在仏日本大使館が彼等のために門を開き、芝生の広がる素敵な中庭に面したホールで、盛大なレセプションを開いてくれた時だった。そろそろパンに飽きて、白い炊きたてのご飯が食べたいなあと思っていた時、大皿にすし、鮎、寿司が出てきたのだ。お〜っと歓声を上げる。さらに、きわめつけは、夫君のパリ在住作家辻仁成さんとともにかけつけてくれた憧れのアイドル中山美穂さんの姿を見た時だった。あ〜という間に人垣ができて、このチャンスを逃すものかと写真を撮ってもらおう。かのエンターティナーKさんは、ナント、あ〜という間に美穂さんの頬ぺたにキスをしてしまった。悔しがっていたのは、周りのオトコたち。ビーバップ・ハイスクールに夢だった世代にとってはまさに最高のプレゼントだった。

事前の天気予報では、ほとんど雨が曇りの予報だったのに、現地では用意していた雨具はバックの中で眠ったまま。シュバルからの帰りのバスの中、突然、ザーッと音を立てて雨が降り始めた。やっぱり来たかと思ったが、バスを降りる頃にはカラッと晴れる。大使館でのレセプションで齋藤大使にそのことを話したら「きつと何かいいことがあるかもしれませんよ。」とにこやかな笑顔で答えてくれた。いい気持ちのまま、日本に帰ってきたら成田は雨、岩手は-2度、積雪15センチ、翌朝標高450Mの奥中山は-8度。次の日の朝は、-14度。世の中そんなに甘くないということなのかなあ。

ヤレヤレ、こうしてアール・ブリュットの不思議な、そして素敵な旅は無事終わったのでした。

パリ発！日本のアール・ブリュットからのメッセージ

陶芸家 / NPO法人ラポラポラ代表 工藤 和彦

アール・ブリュット・ジャポネ展がいよいよ始まった。オープニングには2000人を超える関係者が集まった。特にアール・ブリュットの愛好者たちの視線は熱く、これまで既存の芸術文化に対する挑戦的な企画を打ち出してきた、アル・サン・ピエール美術館が、どのように日本のアール・ブリュットを迎えたのか関係者らは興味津津の様子であり、世界各国から集まってきた。美術館のあるモンマルトルの丘は芸術家たちが昔から多く住みつき、苦しい生活の中から新しい芸術を生み出してきた地域である。日本人はとかく、この地域に華々しいイメージを持つが、実際はいたるところに落書きがあり、騒々しく、パリの中でも治安が悪い地域とされている。しかし、無菌状態の実験室から生まれる芸術よりも、混沌として人間臭い所から生まれてくる芸術の方が心底、力強いエネルギーを持つのではないだろうか。そんなことから、アル・サン・ピエール美術館は、有名なルーブル美術館やポンピドゥーセンターとは、全く違った視点を持ち、現在の芸術文化を見つめ直す機会を与える事が出来る貴重な美術館といえる。アール・ブリュット・ジャポネ展がこのような美術館で開催されるのは、本当に素晴らしい出来事だと思う。

欧米の人からしてみると、日本のアール・ブリュットを見た経験は少ない。特に今回のように60名にも及ぶ作品群を見る事は初めてであろう。日本でも、この規模で開催された事は無いので、世界で初めての経験と言っても過言ではない。

欧米と日本では無論、気候や宗教、考え方など多くの違いがある。しかし、インターネットなどの情報社会が進んで、お互いに文化を理解する機会が整い、驚くほど欧米人たちは日本についての情報を持っている。アニメーションやマンガは欧米でも人気なので当然であるが、アート好きなインテリたちは日本文学に対しても驚くほど深い造詣を持っている。とは言っても、日本人にすら一般的ではない日本のアール・ブリュットに対しては、全く情報を持っていない。欧米の愛好者たちが、日本のアール・ブリュットを初めて鑑賞して、興奮している状況はこちらにもひしひしと伝わってきた。

既存の美術の概念に属さないアール・ブリュットは文化や流行の影響をあまり受けていない。図案化された形、モチーフ、漢字などの文字など、確かに日本文化から借り入れてきたものはあるが、それは個人的な関心事をユニークな思考と直感とで組み合わせる素材にしかなく、やはり、日本のアール・ブリュットにおいても

日本文化の影響の印象は薄い。だからか、欧米人の鑑賞者たちに感想を聞いてみても、日本人と作品から受けとる感覚に差異はあまり感じなかった。むしろ、感覚だけを頼りに作品と対峙している欧米人の絶賛ぶりを見ると、日本人以上に作家の深淵を見ているのではないかとさえ思えた。

海外で改めて日本のアール・ブリュットを見返して、「アール・ブリュットは国境を超越しており、だからこそ普遍的な表現として、見る人の心を捉えるのだ」ということに気付かされた。日本も欧米もアール・ブリュットに至っては、既存のアートの文脈に関係ないからこそ、解放的で自由であり、人間の抱えている深い哲学的な根幹を共有することが出来るのである。

2008年に行われたスイス・ローザンヌのアール・ブリュット・コレクションでのJAPON展では、日本文化を意識させる展示演出が多かった。展示室の床にテープを貼って「畳」を連想させたり、「障子」のような間仕切りを施したり、日本文化を意識させることで、一般人へ「日本のアール・ブリュット」への関心を増長させようとしたものだった。これに対して、アル・サン・ピエールの展示はニュートラルな立場に立って、「アール・ブリュットをどのように捉えるか」という問いかけの印象を受けた。特に日本文化を象徴する演出は一つなかった。後にアル・サン・ピエール美術館のマルチエヌ・リュサルディ館長にお伺いしたところ、「とかく、フランスの記者たちからは日本のアール・ブリュットと欧米のものとの違いを聞かれるが、私は逆に類似している事を伝えている」と言っておられた。常に世間に芸術の深淵を覗かせようとするアル・サン・ピエール美術館の手法かもしれない。とても参考になる。

陶芸家として、日頃から茶碗や和食器を制作している私にとって、日本文化、伝統はとても重要な要素だ。しかし、文化や伝統もその形式を引き継いで行くだけでは、いずれ力を失い衰退してしまう。常に、普遍的な「美」がそこには存在していかなくてはならない。今回、私はアール・ブリュット・ジャポネ展に関わって、鮮明にそれらの事が理解できるようになった。

「アール・ブリュットから何を学ぶか」それは、これからも個人的な挑戦である。

自らの作品を出品し、オープニングに参加している日本のアール・ブリュットの作家たちは、至ってマイペースだった。これはアール・ブリュットの作家の特徴でもあるが、自分を主張したり、称賛を求めたりするような行動はない。逆に目立っていたのは作家たちを支えている家族や、関係者たちだろう。一大イベントのオープンの喜びは押えられるものではない。北海道在住の作家たちの作品を発掘して、幸運にも今回の展覧会に結び付けるお手伝いが出来た私も同様である。しかし、感激に浸ってばかりはいられない。日本のアール・ブリュットを支えてきた関係者にとっては、これからが正念場となるだろう。日本のアール・ブリュットがパリでの展示を終えて、日本に凱旋する時、どのように迎えて育てていくのか、パリでの展覧会の成功が伝えられるほど、そのハードルは高くなっていく。

アル・サン・ピエール美術館
アール・ブリュット・ジャポネ展

現地レポート

文・写真/ 白石 淳子

アル・サン・ピエール美術館は、モンマルトルの丘の麓にある。ここモンマルトルは、世界中からパリを訪れる観光客のメッカでもあり、フランス語以外の世界中の言語も聞こえてくる場所だ。

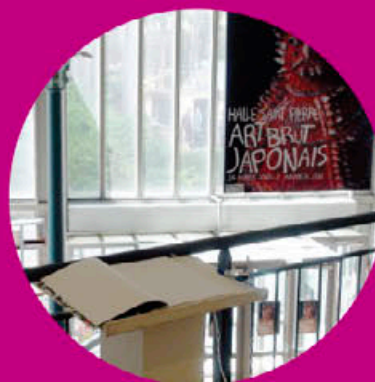
日曜の午後、美術館の入り口を入るとすぐに展覧会の入場券を買い求める来場者の行列が目前に押し寄せた。週末は400から500人の来場者。平日と併せて1200名にも及ぶとの事。フランスの公共ラジオ放送のフランスインフォ、ルモンドグループのフランス文化雑誌テレラマ等、この展覧会が多くのメディアに取り上げられた反響は大きい。

来場者は、入場券を購入した後まず1階の展示室に進む。入るとすぐに始まりを告げる暗闇が、来場者を包み込む。肌に伝わるひんやりとした冷たさと静寂の中、スポットライトの当たった作品群がその存在感を空間に波紋させている。次々と入って来る来場者が、放射状に仕切られた会場に織り込まれていく。静けさと、作品の与える緊迫感に、来場者も息をのむ。来場者はじっくりと一つひとつの作品を覗き込む。

2階に上がる螺旋階段を登ると、ガラス張りの建築空間を生かした開放的な空間が広がる。光の恵みに抱擁された作品群が来場者のこころを解放する。開かれた空間に、光の恵み、幾分リラックスしているように見える来場者同士が、自由に作品について問答を繰り返している。

会場の出口にある記帳ノートはもう2冊目を越えた。世界各国の言語が、アール・ブリュット作家の作品を讃えている。1階と2階、2種類の空間が与える光と間の演出は、作品の像一つひとつを来場者の胸に感光させ焼き付ける。展覧会に来られた一人ひとりの内側に、作品から伝わるアール・ブリュット作家の想いが宿る。

白石淳子
フランス国立パリ第8大学大学院在籍。造形美術を専攻し、主に美術制作と美術理論を研究。アール・ブリュット・ジャポネ展においては、鑑賞ツアーやオープニングレセプションの通訳を務めたほか、展覧会の様子やパリのメディア報道の状況など、現地の様子をリアルタイムに日本に情報提供している。



アール・ブリュット・ジャポネ展 主催/会場 パリ市立アル・サン・ピエール(HALLE SAINT PIERRE)美術館

【後援】(予定) 在日フランス大使館、在フランス日本大使館 【助成】 日本財団 The Nippon Foundation 財団法人 デイトロン福祉財団 【協賛】 笹川日仏財団

【日本事務局】 滋賀県社会福祉事業団 企画事業部(ポーダレス・アートミュージアムNO-MA) 担当(田端、齋藤)

所在: 〒523-0893 滋賀県近江八幡市桜宮町235 電話: 0748-31-2481 FAX: 0748-31-2482 E-mail: art-brut@sisyazi.jp

アール・ブリュット・ジャポネ展 ニュースレター 2010年6月発行
編集/発行 滋賀県社会福祉事業団 写真: 大西暢夫 デザイン: 高石巧